



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「ミティラー画の春」

杉花粉とともに、春がやってくる。インドの春といえばホーリー祭だが、水掛け祭、色掛け祭として知られている。色粉を水に溶かして、誰彼なくぶっかける。それどころか、貯水池に投げ込まれるのをみた。色粉そのものを他人の顔になすりつける。この日だけは女性に触れることも無礼講だ。ペンキをぶっかけてくる悪ガキもいる。わが輩は牛糞をなげられた経験がある。「クソッ！」と悔しかった

色粉は青赤黄などの原色で、植物由来のものである。一例をあげると、ウコンは黄色だがレモン水につけておくと赤色に変わる。ビハール州の村の女たちが植物や鉱物の粉で、土壁・紙・キャンバスに絵を描くと素朴なミティラー画になる。

ミティラーは、東インドのビハール州北部の地方である。今日では寂れた農村風景が広がっているが、かつては古代ヴィディーハ国の首都であった。ブッダやジャイナ教祖マハーヴィーラなどが活躍した地方でもある。また『ラーマヤナ』物語に登場するラーマ王子とシーター妃の出会いの地(婿選び)でもある。現在その場所は「ジャナクプル」、聖地「ジャナクプルダム」と呼ばれ、ネパール領になっている。聖地名はシーター妃の父ジャナカ(哲人王)に由来する。

この地方の農村の女性が壁に描いた絵を総称して「ミティラー画」という。インディラ・ガンディー首相が紙に描いて売ることを奨励したといわれているが、これは、はてなマーク(?) だと思う。

日本人で最初にミティラー画に関心を示したのは、1960年代初頭にインドに留学していた坂元正武画伯である。デリーのコンノート・プレイスでミティラー画を初めて見て魅惑され、すぐさま汽車に飛び乗りパートナーにやってきた。そこからマドバニの村々を訪れたという。その頃のビハール州は治安が悪く盗賊も出没した。

坂元画伯は、京都美大卒、パナソニックに勤務、長年ネパールのNGO活動をしていた。ジャナクプルを度々訪れ、ネパール側のミティラー画を蒐集していたようである。また自らミティラー画を描いていた唯一の「ミティラー画家」であった。わが輩は奈良市での個展を観に行ったことがある。油絵も描いていて、近年六号キャンバスの絵を頂いた。『画家年鑑』によると号5万円だそうで、30万円の絵画をいただいてことになる。画題はネパールの風景であった。送られてきた額付きの油絵は、狭いわが家に飾ることができず、それに相応しい方に寄贈した。

サラリーマン生活をしながら、一体いつキャンパスにむかうのか、と聞いたことがある。仕事がおわってから、自宅でこつこつと描いていた。たぶん、それがストレス解消になっていたのだろうと思った。

初渡印前に初めてミティラー画をみたのは大阪高槻市のインド風施設（インド好きのたまり場）であった。EXPO'70 インド館で展示していたものが無償で供与された。長い年月で退色し、それに水彩絵具を重ねたため、明るくなったが素朴さが消失してしまった。

2月4日、NHK「こころの時代」に長谷川時夫さんが出演していた。新潟県十日町のミティラー美術館長である。美術蒐集家ではなく「前衛音楽のボーカリスト」としての出演であった。その昔、インドから帰国後、恩師小西正捷先生（文化人類学）の誘いでセミナーに参加したことがあった。小学校の廃校を利用した施設で、美術館というよりは山間の合宿所のような雰囲気であった。長谷川さんがミティラー画の解説をし、小西先生がタブラを演奏したことだけが記憶に残っている。その後来日した女性がミティラー画を描いていたが、悲しいことに不慮の死を遂げたと聞いた。

先日、古い印友のN商人が長いながい旅から日本に帰ってきた。それなら、「ご苦労さま会」をしようということになり一席設けることにした。お土産に『Shashwat』という分厚い画集とウイスキー、ブッダの絵付き菩提樹の葉を頂いた。

この画集は、ウッペンドラ・マハラティ画伯の作品集である。開けてびっくり、油絵から水彩、水墨画、竹細工、家具、建築のデザインまで広範な作品がならんでいる。大芸術家である。それだけではない。ミティラー画をはじめ民俗文化芸術の発展に寄与した人である。1960年代パトナー大学留学生（杉本卓洲教授）は、村に案内してもらったことがあった。わが恩師も他の日本人も世話になった。わが輩は画伯ほどの親日家を知らない。1950年代に日本に留学し、日本が大好きになり、滞在期間が過ぎても帰国しないので、大使館員が泣きじゃくる画伯を無理やり飛行機に乗せたというエピソードがある。

ガンディー首相のことを前述したが、首相がミティラー画を知ることなく、それを知らしめたのはマハラティ画伯だと、わが輩は思っている。

『Shashwat』（シャーシュワット）を編纂したのは、彫刻家アドワイタ・チャラン・ガラナーヤク国立現代美術館長であった。昨年立命館アジア太平洋大学に作品が寄贈された。二人の偉大な芸術家は、オリッサの同郷であった。わが輩は、昨年小豆島で会った。いや今年一月の共和国記念日にも会った。三月にも会う。『Shashwat』は、英訳すれば「The Eternal Seeker」。永遠の探究者とも訳せようか。

わが輩は、未だに「永遠」の概念が分からず身につかないが、わが輩の外縁は「永遠」という輪で繋がっているように思える。